広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「二十年代派」詩人ナポレオン・ラパシオティスの幻想短編小説群
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 24 : 32 - 45
Issue Date	2018-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046845
Right	Copyright (c) 2018 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

論　文

「二十年代派」詩人ナポレオン・ラパシオティスの幻想短編小説群

橘　孝司
國立臺中科技大學應用日語系　助理教授

1. はじめに

二十世紀初めの数十年間はギリシャにとって激動の時期だった。1912-13 年のバルカン戦争の結果としてマケドニアとクレタが本国に復帰。続く第一次大戦でヴェニゼロスと国王の対立が国家分断を引き起こし、大戦末に協商国側に参戦してトルコに進軍したものの、1922 年にムスタファ・ケマル軍に破れ潰走、翌年スミルナの大破局を迎える。小アジアのギリシャ人共同体は失われ、百万人を超える難民を出し、《偉大なる理想（メガリ・イデア）》の夢は潰えることになった。

文学活動、特に「小説」の潮流に目を向けると、1880 年代に新アテネ派は村落の伝統的生活をリアルに描写する短編の「風俗小説」*ηθογραφία* [1)]から出発したが、次第にグリゴリオス・クセノプロス Γρηγόριος Ξενόπουλος に代表される複雑な都市の生活を描くリアリズム長編へと拡大していく。同時に、アンドレアス・カルカヴィツァス Ανδρέας Καρκαβίτσας の『乞食』*Ο Ζητιάνος*（1896 年）により導入された、社会の現実を冷徹に見つめる自然主義文学な流れは、二十世紀の十年代に二人の長編作家によって体現される。ケルキラ島の貴族出身のコンスタンディノス・セオトキス Κωνσταντίνος Θεοτόκης と象徴派詩人としても知られるコンスタンディノス・ハゾプロス Κωνσταντίνος Χατζόπουλος である。ともにドイツに留学し社会主義思想に触れた二人は旧支配層の没落と市民階級の勃興、富者と貧者の差別といった視点から長編を書いている。ただし、ハゾプロスの方は詩人としての資質から、個人の心理描写へと沈降していく（例えば、長編『秋』*Φθινόπωρο*、1917 年）。さらに二十年代に、大破局以降の社会の閉塞感、現実逃避を夥しい短編で描き続けたのはディモステニス・ヴティラス Δημοσθένης Βουτυράς である。（彼の視点はこれに続く「三十年代派」のアンゲ

ロス・テルザキス Άγγελος Τερζάκης の初期作品に受け継がれる。）

前回取り上げたマキス・パノリオス『幻想短編』には[2)]、このヴティラスと同時期の「二十年代派」詩人として知られるコスタス・カリオタキス Κώστας Καρυωτάκη とナポレオン・ラパシオティス Ναπολέων Λαπαθιώτης の短編小説が収録されている。厭世観と迷走、喪失、現実逃避、個人への回帰、諷刺などで知られるこの詩人たち[3)]の綴る幻想的な散文とはどういうものなのであろうか。本稿では、カリオタキスの陰に隠れがちの、ラパシオティスの幻想短編小説を分析する。まず、作家のプロフィールを簡単に紹介した後で、収録作品のあらすじを述べ、類似のモチーフを持つ英国作家の怪奇短編小説と比較する。さらにラパシオティスの他の散文作品も併せて観察することで、彼にとって《幻想性》とはどんな意味を持つのかを探ってみたい。

2. ラパシオティスのプロフィール[4)]

ナポレオン・ラパシオティス Ναπολέων Λαπαθιώτης は 1888 年アテネに生まれた。父レオニダスは陸軍大将にまでなった軍人、母ヴァシリキは十九世紀の傑出した政治家ハリラオス・トリクピスの姪というから名門の出である。幼い頃より英仏伊語、ピアノ、絵画を学ぶなど一人息子として大事に育てられた。1905 年アテネ大法学部に入学するが、弁護士として活動することはなかった。1916 年父とともにテサロニキに行きヴェニゼロスの「エスニキ・アミナ」に参加、1917 年にはエジプトに赴きカヴァフィスとも知り合う。もともとはヴェニゼロス支持者だったが、1920 年代から次第に左翼に接近するようになる。ただ、青年期からすでに友人たちと夜のアテネを徘徊しボヘミアン的生活を送ったようであり、1937 年に母を、1942 年に父を亡くしてから生活は没落していく。やがて無頼生活の中で麻薬に溺れ、貴重な蔵書も売り払ったあげく、1944 年自宅でピストル自殺、自ら 56 歳の生涯を閉じた[5)]。ドイツ占領軍撤退の数ヶ月前のことだった。

早くから文学に目覚め、1905 年 17 歳にして雑誌『ヌマス』に詩作を発表している。『ネア・エスティア』『ヘラス』『パナシネア』誌や『アクロポリス』『エスノス』『エレフセロン・ヴィーマ』紙など様々な雑誌・新聞に投稿しているが、生前に書籍出版されたのは、習作風の一幕物劇『暴君ネロ』*Νέρων ο τύραννος*（1901 年）を除き、詩五十篇を収めた『第一詩選集』*Τα ποιήματα. Πρώτη επιλογή*（1939 年）のみである。他に翻訳として H.G.ウエルズ『タイムマシン』（1921 年）やアンドレ・ジッド『オスカー・ワイルド』（1944 年死後出版）がある。二

十歳後半から発表した官能的な詩や八十年代派詩人への批判などによりスキャンダラスな面で注目を集め、同性愛を公然と肯定して、検閲の対象になったりしている[6)]。

320 篇に及ぶ詩の作風は、唯美・官能主義から出発し、やがて絶望、憂鬱、喪失した理想と過去への憧憬が基調となっていく[7)]。八十年代のパラマスの「新アテネ派」とセフェリスらの「三十年代派」に挟まれた「目立たぬ声」χαμηλή φωνή[8)]の「二十年代派」とされ、それも（同じく自殺した）代表格カリオタキスの陰に隠れたマイナー詩人に入れられるのが文学史の常である。民衆語推進の牙城『ヌマス』『ネア・エスティア』『アクロポリス』などの投稿先からも分かるように、作品はごく一部を除き平易な民衆語で書かれている。

自殺に終わるエキセントリックな人生自体が後人の興味を引き続け、タキス・スペツィオティス Τάκης Σπετσιώτης 監督により『*Μετέωρο και σκιά*』(1985) として映画化されている。

3. ラパシオティスの短編小説「非常に奇妙な症例」

ラパシオティスは何よりも詩人として記憶されているのだが[9)]、実は短編小説・散文作品（スケッチ風の小品）も 100 篇以上残している。ただ、雑誌掲載されたままで、ほとんどまとまって書籍刊行されておらず（上述のように、詩集でさえ生前刊行は一冊のみ)、この点がいまだに短編・散文作品が評価されない理由の一つらしい[10)]。

パノリオス編『幻想短編』に収録された**「非常に奇妙な症例」***Μια πολύ παράδοξη περίπτωση*（以下「奇妙な症例」と略。II, σσ. 95-98.）はわずか 4 頁、短編というより掌編という方がふさわしい。まず、ストーリーを簡単に記しておく（試訳は本稿末に掲載)。

物語は語り手《わたし》の親友ニコスが自殺したという知らせから始まる。親友は戦場から復員して以来、何故かすっかり人間嫌いになっていた。最初は説明を避けていたが、或る夜散歩の途上で《わたし》に理由を明かす。実は戦場で受けた傷がもとで《世にも奇妙な症状》が自分の身に現れるようになった。自然と相手の心理が「ガラスの中のように」読み取れるというのである。周囲のほとんどの者が悪意を抱いているのが見えてしまい、唯一の例外は献身的な妹だけ。親友は他人との交流を恐れ、人間に絶望して自殺に至る。

この作品はもともと週刊誌『ブーケ』*Μπουκέτο*（1933 年 4 月、470 号）に掲載された。短編の投稿先で最も多い（61 篇）のが、この一般向け雑誌であり[11]、『ヘラス』*Ελλάς*（19 篇）、『パナシネア』*Παναθήναια*（9 篇）が続く。それ以外は各雑誌・新聞に一篇から三篇のみの投稿である。

4. J.D.ベリスフォード「人間嫌い」との比較

他人の心理が見えすぎる人間の不幸というモチーフは、新奇なものではなく、例えば、英人作家 J.D.ベリスフォード（John Davys Beresford, 1873–1947）の短編「人間嫌い」*The Misanthrope*（1918）でも使われている。怪奇小説としての出来は巧みに構成された「人間嫌い」には到底及ばないのだが、ラパシオティスの特質を明らかにするために、本稿では敢えて両作品を比較してみたい[12]。まず、ベリスフォード「人間嫌い」のストーリーをかいつまんで紹介しておく。

ガーランドなる孤島に隠者がいると聞き《わたし》は好奇心から島に向かう。隠遁した理由は様々な噂にもかかわらず定かではない。隠者コプリーは意外にまっとうな様子で《わたし》を迎える。ただ、島を案内する際《わたし》より前に立とうとはしない。その夜おもむろに秘密を打ち明ける。その奇妙な症状は子供の頃から始まった。肩越しに人を振り返ると、相手の悪徳や欠点が見えてしまうのである。兄や舎監に始まり誰も彼もが実に醜怪な顔をしている。眼科医は《新しい型の乱視》などと診断するが解決にならない。医師の顔すら醜い豚に見える。最後は婚約者の真の顔を見てしまい、絶望から島に隠遁する。翌日船で別れる際肩越しに《わたし》を見た彼は「おろかしいまでの嫌悪の表情」を見せていた。

両作品はモチーフと語りの構成の点で表面的には似ている。どちらも人の内面が見えすぎる人間の不幸と破滅を描いている。冒頭で、「語り手」のコメントを通して「当該人物」（ニコスとコプリー）の悲運が予め暗示される。病気の症状や発生した状況は、中段から「当該人物」自身が《わたし》に代わり「語り手」となって明かす。病気の原因は明確には語られない。「奇妙な症例」では戦場での頭の傷の後発症したと言われるだけであり、「人間嫌い」では《精神的乱視》などとレッテルを貼られるだけで究明されない。

一方で両者の違いを見てみよう。この点で両作家の狙いの差異がはっきりしてくる。

「人間嫌い」は、「当該人物（コプリー）」から距離を置く冷静な観察者として「語り手」が登場するが、コプリーの具体的な告白を聞くうち恐怖に取り込まれていき、最後は――短編小説に不可欠の――切れ味鋭い結末で幕を下ろし、不気味な余韻を残す。つまり「人間嫌い」では不思議な症状（能力）が覗かせる人間性の深淵、その恐怖がテーマになる。一方、「奇妙な症例」でも、「当該者（ニコス）」が周囲の観察を通して症状を自覚し苦悩するのだが、絶望の感情が本人の口から滔々と語られる割には具体的描写が少なく、そのため異常性が読者に伝わらない。決定的に違うのは、もともとニコスに好意を持つ「語り手」が告白を受けた後でも、症状の真偽やその内容への恐怖ではなくニコスの身を案じるだけという点である。「奇妙な症例」の冒頭「死を知ったとき少しも驚きはしなかった」は「人間嫌い」の「島から帰って＜…＞あの男がひとを馬鹿にしているのではと思いはじめたものだった」と好対照をなしている。同じように「奇妙な症例」の結末「彼は救われたのだと思い自分を慰めた」という安堵感は「人間嫌い」の「わたしはふたたび島へ行って彼が何を見たのかをたずねる勇気などない」という居心地の悪さと真逆の方向を指している。

つまり、ベリスフォードでは「語り手」が「当該人物」とは距離を置きながら話の信憑性に大いに迷うことで、読者の日常を揺さぶる怪奇譚を提供するのに対し、ラパシオティスの「語り手」は「当該人物」に深い共感を持つばかりか、ほとんど同化しかかっている。

このように見てくると、ラパシオティスの掌編はベリスフォードの巧みな怪奇小説とは似て非なる断片である、と言わざるを得ない。しかし、はたしてそれは失敗した幻想短編なのだろうか。

5. ラパシオティスの短編小説群

小説としての完成度を「人間嫌い」と比べ優劣をつけるだけで終わると、作家性の多くを見落としてしまう。そこで、「奇妙な症例」を作家の他の作品の中に並べてみることで、その狙い、そしてこの作家にとって《幻想小説》とは何であったのかを探ってみたい。そもそも、彼は《幻想小説》を書こうとしていたのだろうか。

上述したように、ラパシオティスの散文作品は未だまとまって出版されていないが、マノス・トラヤノスがネットに公開した『ラパシオティス　短編小説と散文作品』[13)] が利用できる。短編小説・散文が 106 篇収められており、序論と掲載雑誌情報も完備している（ただし最終版ではないようである）。本稿でも

これを利用させてもらう。

一読すると、ラパシオティスの詩について言われる孤独、絶望、憂鬱、逃避、死などの特徴が短編・散文作品群にも充溢しているのが感じられる。いずれの作品も「奇妙な症例」同様に 4-5 ページとごく短く、テーマ自体は要約すれば一言で終わってしまうようなものが多い。

《幻想》という点から見てみると、確かに、日常を越えた《超自然》の要素を含む作品がある。例えば、「謎めいた友人」*Ο μυστηριώδης φίλος*（1925 年）[14] では真夜中過ぎに《死神》が主人公の書斎を訪れ死の世界へ連れ去る。ポオ風に晩秋の垂れ込める雲、突然の古時計の響き、蝋燭の炎の揺れ、表通りでの悲鳴等々道具立ては揃っているのだが、しかしながら読者にはたいした驚異・恐怖が感じられない。語り手は人生の決算をつけようと遺書を準備しているところであり、《死神》を恐れるどころか、待ち望んでいたように一緒に家を出る。

逆に、主人公が死の直前に何かの契機（虫の声、猫）により自殺を思いとどまれば、「コオロギ」*Το τριζόνι*（1912 年、『パナシネア』）や「危機の瞬間」*Η κρίσιμη στιγμή*（1930 年）のような作品が生まれる。前者では庭のコオロギの声（昔愛した少女のあだ名が《コオロギ》）により、後者ではひょっこり部屋に入ってきた猫によって生の世界に引き戻される（作家は実際に数匹の猫を可愛がっていたらしい）。結末は「謎めいた友人」とは正反対だが、《死神》という超自然の怪異も、日常的なコオロギ・猫もいわば同一の存在レベルに属しており、前者のみが禍々しい存在というわけではない。

また、ある作品には《幻視》が現れる。例えば、医学生が悪戯で拾った頭骨のせいで人生の縮図の夢を見る「頭蓋骨」*Το κρανίο*（1929 年）、学生ニコスが夜のザッピオン展示場前で出会った見知らぬ女に夢の中で再会する「出会い」*Το συναπάντημα*（1925 年）。部屋に置いた頭蓋骨の位置がいつの間にか変っていたり、見知らぬ女の正体が明かされないなど奇怪な部分はあるのだが、夢で人生の虚無を感じた医学生は骨に憐れみを感じ、ニコスは三度目の邂逅を求め雨の中で女を待ち続ける。主人公たちは、通常なら怪奇とされる現象に自ら傾斜していく。

このように、不可思議な対象が実在かどうかなどは問題とされておらず、語り手がそれを望み惹かれていく点が重要である。全ては現実逃避・死への願望が生み出した幻影かも知れない。現実逃避が目前の死ではなく、過去の美しい憧憬に向かえば、「ジャスミン」*Το γιασεμί*（1930 年。初恋を思い出させる栞代わりのジャスミンの花弁）や「色褪せた古手紙」*Ένα παλιό, κιτρινισμένο γράμμα…*

（1932 年。古いドレスのポケットに忘れられた恋文）のような哀愁漂う回想談に近づく。

一見怪奇小説風タイトルの「吸血鬼」*Ο βρικόλακας*（1929 年）に現れるのは（パラスホスやパサヤニスが描いた [15]）怪異ではなく、何十年かぶりに故郷を訪れたものの馴染みの場所を見いだせず、墓から復活した死者もどきである自分を自覚する人物であり、題名は比喩的表現にすぎない。むしろ、「死せる者」*Ο πεθαμένος*（1929 年）の方が、ギリシャ土着の「死せる兄弟の歌」のような「吸血鬼」伝説を風俗小説風に仕立てている。ここでは、小アジア戦役で戦死した兄の霊が病床の弟を迎えに来るが、母の懇願を入れて一人で冥府に戻る話になっている。前回論じたように [16]、この伝説には戦慄する部分もあるのだが、死にきれない者の悲哀や未練が主題である。

例外的に、効果的な恐怖の幕切れを持つのは、「十六人目」*Ο δέκατος έκτος*（1932 年）だと思う。座席が十五しかない夜行バスの中で「語り手」だけが奇怪な乗客を目にする。ラストで運転席に座っている者の姿に「語り手」は戦慄し、それが読者にも伝染するのである。

トラヤノス（Τραϊανός, 2012a:14）は、ラパシオティスの短編の弱さは、テーマ・表現の繰り返しが多くマンネリズムに陥る点、人間心理の掘り下げが不足している点であると指摘する。他方で強みは、繊細な感傷性、象徴性、浪漫性に溢れ、散文であっても音楽性を湛える点としている。つまり、彼の詩作品の特徴が短編小説にもそのまま当てはまる。ストーリー・テリングの点で言うと、冒頭から読者の興味を惹いていく手際は見事だが、結末が弱い（Τραϊανός, 2012a:9）。（サーカス芸人の緊張した三角関係が破滅につながる「トムとボブ」*Ο Τομ κι ο Μπομπ*（1910年、『パナシネア』）や家路につく酔っ払いの心に響く声「闇の三つの声」*Οι τρεις φωνές, στα σκοτεινά…*（1932年）などにはまさにこの特徴が現れている。）この弱点は、短編小説、まして幻想怪奇小説としては致命的だろう。冒頭の奇妙な設定と抒情に富む語りで盛り上げてはいくが、《ひねり》がなく結末が肩すかしというのでは、読者に驚異・怪異を感じさせるのは難しい。結末で明かされるのが、想像を超えた未知の要素ではなく、予想した範囲内のもの、しかも語り手が共感を持つ対象（極論すれば作家の分身）だからである。「謎めいた友人」、「頭蓋骨」、「出会い」、「死せる者」などには、「人間嫌い」のような怪奇小説に必須の、語り手と対象の距離がなく、前者は後者に同化しかかっている。そうなると当然、死、不安、閉塞、逃避といった自分の心情を《ひねり》なしに繰り返し描くマンネリズムに陥りがちになるだろう[17]。（ト

ラヤノスは、書き過ぎで充分構想が練らずに発表されたものが多いためと想像する（Τραϊανός, 2012a:10）。

それでも、1930 年代のものでは語り手が距離を置き、冷めた目で対象を描くことで、ストーリーにたいした《ひねり》はないにしても、小説という作り物の面白さを目指しているように見える。

例えば、「悪人の意外な善行」*Τ' ανέλπιστα καλά ενός κακού*（1932 年）は善人ではあるが議論好きで周囲から煙たがれる男のおかげで、意外にも語り手が事故から救われる話。「ペトロスの熱情と受難」*Το πάθος και το πάθημα του Πέτρου*（1932 年）では、極端な科学思考の主人公が「反迷信」の啓蒙活動を押し進めるが、行き過ぎて結局「迷信」になってしまうという皮肉が効いている。「奇妙な症例」もこの頃の作品である。あるいは、「ガラスの目」*Το γυαλένιο μάτι*（1932 年）では、周囲の人間は死んでいき自分だけが残される経緯を義眼が語る、という風に奇抜な趣向を使っている。（ただし、この趣向にはアンドレアス・ラスカラトス「髑髏の語った話」（1887-88 年）という大先達の諷刺作品がある。）

これらはストーリー展開で読者の興味を引き、何とか新奇なものを産みだそうとする作品のように感じられる。しかしそれ以上に印象に残るのは、人生の一場面を切り取って丸ごと読者に投げ出し、出来事の起きた理由・背景を説明しない作品だろう。今この瞬間の至福を感じる女が拳銃を弄んだ末事故が起きる「影」*Σκιές*（1930 年）、出勤の際家の階段を二度と上れないという突然の不安を感じ急ぎ帰宅する男の悲劇「罠」*Η παγίδα*（1932 年）、月夜の海岸で自殺を目撃するが遺体が消えてしまう「幻覚」*Η οπτασία*（1932 年）、重病人が秘密を打ち明ける直前に臨終し家族にしこりが残る「秘密」*Το μυστικό*（1930 年）などは、論理的に結末を割り切ろうとしない分、人間実存の不安をそのまま正面に差し出しており、妙に現代的に感じられる。

6. 結論

こうして見てくると、「非常に奇妙な症例」も孤立した短編ではなく、ラパシオティスが紡ぎ続けた同傾向の作品群の一つであることがわかる。そもそも、超自然の怪異を素材として、読者に驚異・恐怖の感情を引き越すべく設計された《幻想》作品とは言いがたい。自身の恐怖・不安・憂鬱・現実逃避といった心情の象徴となり得る素材であれば、通常なら不吉とされる「死神、髑髏、死者」であれ、真逆の「ジャスミンの花弁、古手紙」であれ頓着することなく選択する。その実在性は問題にされず、それをめぐって「人間嫌い」のように恐

怖することもない。死は「奇妙な症例」の《ニコス》にとってはもちろん、同化しかかってる《わたし》にとっても回避すべき忌まわしいものではなく、惹きよせられ「救い」にさえなるものである。

11 年後に小説の結末を地で行くことになる「二十年代派」ラパシオティスにとって、《ニコス》も語り手の《わたし》もほとんど作家自身から距離のない存在だったように思えてならない。

注

1) 通常「風俗小説」「ジャンル・ストーリー」と和訳される *ηθογραφία* は英語でも適切な訳語がないようで、Beaton (1994:72)は、十八世紀の最後の二十年間に現れた、「ほぼ同時代の小さな伝統的社会を自然な場面の中で細密に描写する」作品という定義とともに *folkloric realism* なる語を提案している。これに対し、（クセノプロスに代表される）都市部の社会を描いた作品群を *urban realism* と呼んでいる (p. 99)。

2) Μάκης Πανώριος, *Το Ελληνικό φανταστικό διήγημα,* 1987-2012, 6 τομ., Εκδόσεις ΑΙΟΛΟΣ. 本稿は、ラパシオティスのみに絞って論じるが、内容的には橘（2017）の続編である。

3) Beaton (1994:122-7).

4) Τραϊανός (2012:xi ff.), (2012a) に基づく。

5) ギリシャ文学者の自殺例は珍しい。ペリクリス・ヤノプロス Περικλής Γιαννόπουλος (1869-1910, 41 歳)、ピネロピ・デルタ Πηνελόπη Δέλτα (1874-1941, 67 歳)、コスタス・カリオタキス Κωνσταντίνος Καρυωτάκης (1896-1928, 32 歳)らがよく知られている。理由や自死の年齢は様々だが、いずれも十九世紀の最後の三十年間に生まれた人々である。

6) Τραϊανός (2012:x).

7) Πολίτης (1985[4]:247), Δημαράς (1987[8]:450).

8) Beaton (1994:123). もともとはマノリス・アナグノスタキス Μανόλης Αναγνωστάκης がこのグループの詩人の選集につけた題名 *Η χαμηλή φωνή. Τα λυρικά μιας περασμένης εποχής στους παλιούς ρυθμούς*, 1990, Νεφέλη, Αθήνα。

9) ギリシャの中学校国語読本でもラパシオティスは「かわいそうな鳥たち」「夜の一幕」などの憂鬱に満ちた抒情詩が採られている。

10) Τραϊανός (2012a:3). 最近出版された短編集（30 篇所収）として Νίκος Σαραντάκος, *Τα μαραμένα μάτια και άλλες ιστορίες,* 2012, Ερατώ, Αθήνα。

11)『ブーケ』*Μπουκέτο* は 1924 年から 1946 年までアテネで刊行された一般向けの週刊誌。記事には民衆語が用いられた。文学専門ではないが、著名な詩人作家たち（K.パラマス、Π.ニルヴァナス、K.ウラニス、Γ.ヴラホヤニス、Γ.クセノプロス、Γ.リツォス、Σ.ツィル

カスなど）が作品を提供している。シェリー夫人「フランケンシュタイン」やアガサ・クリスティ作品なども掲載された。

12) 和訳は、ジョン・コリアー他『怪奇小説傑作集 2』東京創元社、1969、中村能三訳を利用する。

13) Τραϊανός (επιμ.) (2012) .

14) 引用雑誌名がないものは全て『ブーケ』誌掲載。

15) 橘（2017:52-53）

16) 橘（2017:50）

17) Πολίτης (1985[4]:247)は同じ「二十年代派」に属するコスタス・ウラニスについて、日々の倦怠や不信を逃れようと『憧憬』『異国暮らし』といった詩集を書いたが、この類いの作品が何ら代わり映えのしない同一の調子であり続けるのは当然である、としている。ラパシオティスも同じ傾向がある。

参考文献

Δημαράς, Κ.Θ. (1987[8]) *Ιστορία της νεοελληνικής λογοτεχνίας, από τις πρώτες ρίζες ως την εποχή μας.* Ίκαρος.

Κόρφης, Τάσος “Ναπολέων Λαπαθιώτης.” *Μεγάλη Εγκυκλοπαιδεία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας,* τομ.9, σσ. 354-365.

Πολίτης, Λίνος (1985[4]) *Ιστορία της νεοελληνικής λογοτεχνίας,* Μορφωτικό Ίδρυμα Εθνικής Τραπέζης.

Τραϊανός, Μάνος (επιμ.) (2012) *Ναπολέων Λαπαθιώτης, Διηγήματα και άλλα πεζά.* Θεσσαλονίκη. (https://ikee.lib.auth.gr/record/130029/files/tra.pdf)

Τραϊανός, Μάνος (2012a) Η διηγηματογραφία του Ναπολέοντα Λαπαθιώτη. Μερικές εισαγωγικές παρατηρήσεις και μια πρώτη αποτίμηση. *Νέα Εστία*, τοχ. 1860 (2013, Δεκ.), σσ. 856-876.（本稿引用ページ数はウェブ公開論文から）

Beaton, Roderick (1994) *An Introduction to Modern Greek Literature,* Oxford UP.

橘孝司（2017）「現代ギリシャ幻想小説序説―後ビザンツ期から十九世紀末まで―」『プロピレア』23 号、pp.50-51.

非常に奇妙な症例

ナポレオン・ラパシオティス

正直言って、数日前友人 N.Δ. の死を知ったとき少しも驚きはしなかった。この人物がいつか自分の命を断つしかないことは承知していた。そればかりか、自殺に至らないので心配になったほどだ。彼の告白を聞き、その人生を支配した異常な病気の後でどうしてまだ生きていられるのか、と実に不思議だったのだ。その異常な、私が生来耳にした中でもことに奇妙な病気はあらゆる扉を彼から閉ざし、すべての喜びの源を奪うことになった。他の者ならあるいは乗り越える道を見つけたかも知れない。たぶん、その特別な状況を逆手にとって利を得ようとしただろう。しかし、ニコスは感受性が強く、それを利用することなどできなかった……私にはその破滅への歩みがよく理解できる。彼は最後まで耐えることができなかったのだ。

彼の告白を聞かされたのは、ある夜二人で帰宅していたときだ。たしか昨秋の暖かい夜だった。映画からの帰り道、街中の《夜の散策》をしていた。ワインを飲み気分は上々だった。その勢いで彼の最近の性格の変貌について秘密めかした調子で訊ねてみた。相手は私の知っている人物ではなくなっていたのだ。

善良で開けっぴろげ、優しく快活なこの友人はここ二年間で――もっと詳しく言えば、悲惨な戦争で受けた頭の傷により何ヶ月か入院して病院を出た後――劇的に変化していた。陰気で疑い深く、友人との交際を避けたがる全くの人間嫌いになっていた……しかしながら医者が保証したように、危険な状態を脱した後、健康には全く問題がなかった。頭の古傷はどの繊細な器官も傷つけずに完治しており、脳は通常通り機能していた。戦争の衝撃のせいで多くの兵士に起きる試練からの神経の危機も乗り越えていた。こういったことは全て治癒していたのだ。それなのに、彼の変化はその時期に一致していた。部屋にこもり誰にも会おうとしなかった。彼の様子をめぐって多くの噂が飛び交った。そうしてその夜、私は確かめようとした。

彼はこちらの質問に動揺した。私の腕を取って小股で歩んでいたのだが、相手の腕が震えるのが分かった。私は自分の詮索を後悔し、声の調子を変えようとした。しかし彼は黙ったままだった。どれほど私に気遣われているのか彼は知っていた――こちらが想像する以上によく知っていたのだ――おそらくそのことで悩んでいるはずはなかった。だが他に何かがあった。質問する前に、こ

ちらの話を予期しているかのように彼の表情が変ったのに私は気づいた。

こういったことは全て、彼が秘密の病を告白した後で、私が分析したことだ。その秘密をはき出すのは初めてで、声も震えていた。私の腕をしっかと掴み、目はあらぬ方に向けられていた。初めは口を開こうとしない。明らかに打ち明けるのをためらっていた。あるいはうまいことばを探していた。しかし同時に私は恐ろしいほどの必要性を感じた。彼を苦しめているものを話させ楽にしてやらねば……私はその秘密が解放されて私を心底驚かす機会を探しているのだと感じた。今彼に差し出されたほど絶好の機会はなかった。私は最愛の友人だった。偽りのない二十年間の友情は些細なものではない。それに私がどんなに愛しているのか、この問いには友人としてどれほど深く正直で邪心のない関心が込められているのかを彼は知っていた……

それから、深くためらいがちな声で秘密を語り始めた。最初はこわごわと――信じてもらえないのでは、あるいは狂人とみられるのではと恐れていた――しかし次第に力がこもり、のどに響く熱の入った、苦渋に満ちた声になっていった。

先ず約束してほしい。ぼくを狂人とはみないでくれ。君にそう思われるのだけは耐えられない。ぼくを傷つけるとすればそれだけだ！　嘘を言ってると思われた方がましだ。でもたとえ狂っているとか嘘つきとか思われるにしても、君が間違ってるって正すことができる……証拠があるんだ！　だから君自身、ぼくが正気だとすぐに納得するだろう。どうしてまだ持ちこたえているのか、自分でも分からない。たぶん、ぼくがもっと苦しむようにとの悪意に満ちた運命のせいか。

……例の戦争の傷以前には考えもしなかった。ぼくだって誰とも変わりない人間だった。慈悲や親切を信じ、夢を抱き、間違いの中で生きていた。……だがあれ以来、何も信じられなくなった。

……何が起きたのか。ぼくには説明ができない。脳の中でどんな変容が生じ、どんな細胞が予想を超えて力を持ちこの特質を得たのか。語るすべがない……今じゃ、このぼくは信じられない現象、世界に例を見ない現象の例と化している。このことがあって以来、人類で最も幸福などころか、一番不幸な男になってしまったんだ。

……最初に事の次第を理解したのは治療の際だった。ある日看護婦と話をしていた時気づいた。話かけられる前に彼女の考えがわかった。唇が動かないう

ちから言おうとしていることが分かってしまったんだ。驚いたのなんの！　……他の人にも実験をしてみた。医者にも、側にいる友人にも。毎日訪れて何時間か一緒に過ごしてくれる妹にも……他ならぬ君に対しても、会いに来てくれる度に実験した。

……愕然としたね！　本を読むように人の心が読める。最初恐れを抱いた。どんなに言葉を尽くしてもわかってはもらえないだろうが。……どんな想像も超えた謎の能力を獲得したということだ！　読心術（ノオマンディア）というのは知っていた。ある者たちの持つ奇妙な特質で、ちょっと集中すれば他人の考えが読めるんだ。しかしぼくの場合はだ、そんな努力をしなくても、相手の思いがまるでガラスの額（ひたい）の中で揺れているように見えてしまう。人の思考の始まり、流れ、ごく小さな動きまでが驚くほどはっきりと見えた。何一つ見逃すこともなく……

……病院を出た後もこのことは続いた。悪夢のように追いかけられて、自分がおかしくなるのが分かった……人を避け誰とも話せなかった！　慰めは動物と一緒の時だけ。心を読んだところで、非常に単純で、裏表なく正直で悩まされることはなかったからだ。人の思考に隠された獰猛さも信じられないほどの欺瞞も化け物じみた狡猾さも持っていなかった。……耐えられたのは妹だけだった。ぼくへの慈しみと他人への優しさが何とか読み取れたからね。自分にとっていやなもの、悍（おぞ）ましい思いを読まないようにぼくはあらゆる友人たちとの縁を切った……

……世間への扉を閉ざした。他人の思考がぼくを苛（さいな）んだ。ヌメヌメして何とも言い難い思考が宙を舞いながら、ぼくの希望を押しつぶしていくのを感じた。まるで飽くことなく締め付けようとするいやらしいヘビだった。ぼくについてみんなが何を思いどう感じるのか、ぼくにはわかっていた。悪意、偽善。数秒と間を置かず言葉と真意の間にあらわれる信じれないほどの恐ろしい距離。これこそがぼくに耐えられないことだった。

……もはや誰をも愛せず、誰ともつながりを感じられなかった。そばに誰かが、たとえ女だろうと、居られるのに我慢がならなかった。誰一人真心（まごころ）を持っていなかったからだ。ぼくが信じていたのは真心だけだった。真心だけを求め、真心だけを渇望した……

……この秘密は誰にもうち明けたことがない。心の奥底に葬り、何年も一緒に生きてきた……それに口にすることなどできなかった。狂人と思われるか、信じてもらえたとしても、相手は自分の心に隠した気持ちを知られるのでは、悪意や欺瞞や秘密を見つけられるのでは、と震えあがってぼくのそばを離れて

いくだろうからね。どっちにしてもぼくはまた一人ぼっちになるだろう……

……ところが、少しずつだがぼくはこういったことすべてに慣れていった。みんなの様子はもはや気にならず、最初ほど恐怖感を受けなくなった。……ただ、ぼくの交友関係は変化して、そばには愛してくれる人たちだけを置くようになった。そして、その人たちの悪意、深い底に隠れた感情、ねじ曲がった倫理感、ゾッとする欲望を今では許すことができるようになった。愛してくれる――どの程度かは問題ではない――、悪意を持たない、それだけで十分だった……

そこで一瞬話すのを止め、手を額に当てた。

私は慰めの言葉をかけようとしたが、相手は手を伸ばし私の肩を抱いた。

「いや、よしてくれ。言いたいことはわかる！　ありがとう……愛してくれてるね。だからこそ、気違いじみた秘密を君に打ち明けたんだ……ずっと知りたがっていただろ、知ってるよ……こうやって打ち明けたことで、ぼく自身ホッとした……

それから突然私の前で身をこわばらせ、痙攣しながら異常な絶望に満ちた様で私の手を取って大声で叫んだ。

「さて、これからどうやって生きていこう。ど・う・や・っ・て？　どんな勇気で人に向き合い、どう心でつながり、どんな目をして近づくんだ？　思いを隠されるたびに傷つけられ、嘘をつかれるたびに、いっそう……震え上がり嫌悪を感じ……あらゆる社会的繋がりを断ち、あらゆるつきあいを断って隠者のように一人で生きていく！　猫たちの稚(いとけな)く原始的な思いに囲まれて。それなら慣れてるし、怯えることも悩むこともない……病院で死ぬか、戦死したほうがよかったんじゃないのか。救いなし、とぼくを断罪して部屋に閉じ込め、希望を踏みつぶし愛を禁じる苦しみの中で、残虐な悪夢の中で生き続けるくらいなら。

その夜以来、彼に会うことはなかった。おとといい自殺を知ったとき一瞬、友人として憐れんだ。しかしすぐ、彼は救われたのだと思い、自分を慰めた。

【テキストは Μάκης Πανώριος, *Το Ελληνικό φανταστικό διήγημα,* 2012, Εκδόσεις ΑΙΟΛΟΣ. Τομ. ΙΙ, σσ. 95-98. による。】